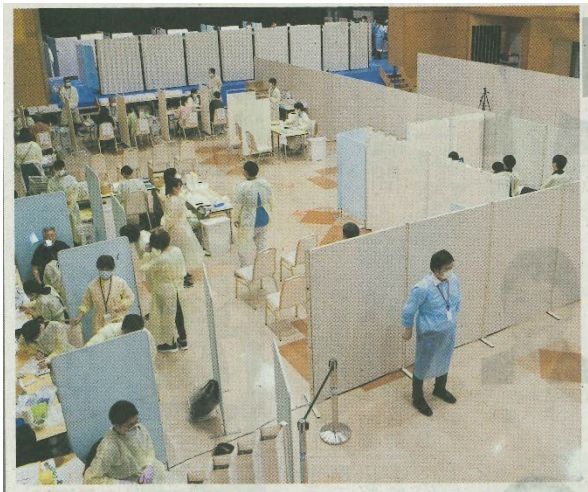
令和８年６月１８日(木)陸奥新報（３面）



ビッグデータを蓄積する岩木健診＝2025年

# 特定の血中成分低値

## 頭痛が起こりやすい人

### 岩木健診ビッグデータ活用、解析

### 予測、対策の指標に

### 第一三共ヘルスケアと弘大研究

日本人の約４割が悩む「頭痛」。第一三共ヘルスケア（本社東京都）と弘前大学、東京大学医科学研究所の研究グループは、弘前大が中心となって取り組む大規模住民合同健診「岩木健康増進プロジェクト」（岩木健診）の健康ビッグデータを活用した解析で、頭痛が起こりやすい人に共通する血中成分の特徴を明らかにした。客観的な評価が難しいとされる頭痛の予測、対策につながる有効な指標として、セルフケアのサポート、ＱＯＬ（生活の質）向上に貢献することが期待される。

青木　優さん

（稲葉智絵）

同社は多様な医療ニーズに応える医薬品の開発、提供を基盤に、機能性スキンケア、オーラルケア、食品分野へと事業領域を拡大。セルフケア推進に向けて、２０２４年3月に弘前大との共同研究講座「健康ライフサイエンス研究講座」を開設し、頭痛や睡眠、口腔（こうくう）ヘルスなどの健康指標に着目した研究を進めてきた。

同社によると、頭痛は日本人の約４人に1人が週1回以上経験しており、身近で重要な健康課題の一つ。一方で、つらくても我慢して医療機関を受診しないケースも多く、日常生活に支障を来すなどＱＯＬ低下につながることが指摘されている。

頭痛が起きる要因には、体質や生活習慣、栄養状態などが関与すると考えられている。脳の血管に関する研究は進められているものの、一般生活者、いわゆる健康な人を対象に実施した血液検査など客観的なデータとの関連性を詳細に調査した研究は限られていた。

研究グループは、24年度の岩木健診受診者1162人（男性約４割、女性約6割）を対象に、過去1年間の頭痛の有無、頭痛の頻度や症状、頭痛時の対処方法などのアンケートを実施。その回答と血液検査を組み合わせて、過去1年間の頭痛経験の有無と関連する因子を分析した。

その結果、頭痛経験者は性別、年代にかかわらず、超長鎖脂肪酸の一種で神経細胞の膜を構成する「ネルボン酸」と、活性型ビタミンＤの「25（OH）D3」の血中濃度が低い値を示した。さらに性別、年齢、体格といった影響を除いた解析でも同様の傾向を確認。二つの血中成分が頭痛の起こりやすさと関係している可能性があることが示された。

このほか、過去1年間に頭痛を経験した人について、その割合は女性や若い世代が高い傾向にあり、医療機関で診断を受けている割合は男女とも1割未満にとどまった。多くの人が自己判断で対処している実態が明らかになった。

今回の研究で中心的役割を担った同社研究本部の青木優さん(32)は共同研究講座開設後、初めての研究成果発表に「大きな一歩。特に、初めてネルボン酸が頭痛に関連することを明らかにできた」と語った。岩木健診で蓄積する経年データも活用しながらメカニズムに関する研究を進めていくとし、「生活者に寄り添った成果を上げるとともに、食事指導といったサービス、商品開発にもつなげていきたい」と意気込んだ。

弘前大副学長の村下公一教授は「頭痛は日常生活やＱＯＬに影響を与えるものであり、多くの人が日常的に悩まされている。それだけに、今回の研究成果は社会的意義が大きいものとなった。さらに研究を進め、予測や有効な対応方法などを見いだし、地域をはじめ世界の人々のウェルビーイング（心身および社会的に健やかで幸せな状態）の向上に貢献していきたい」と述べた。

研究成果は5月21日、横浜市で開催された第67回日本神経学会学術大会で発表された。